

桑名別院を支える人々③

桑名別院世話方

桑名組明光寺門徒
水谷浩平さん(六十六歳)

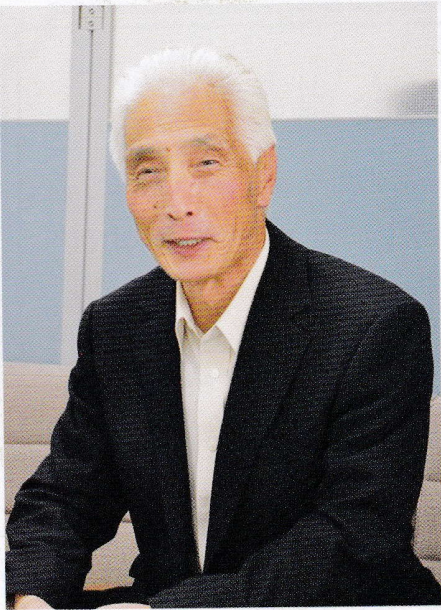
ご縁があったの私

今回は、桑名別院・世話方であり、熱心に聴聞されている水谷さんにお話を伺った。

「よう来てくれた」

「あんたもなあ」

別院では、この短いあいさつの中に同朋に出遇えた喜びが込められている。余計なこ



とを忘れてお互いが笑みを浮かべ、同じ時を同じ場所で過ごす。これが「ご縁」ということ。華講の伊藤敏夫さんの姿を通して学んだ心持である。

境内で剪定をしている水谷さんの姿を見かけられたことはありませんか。三年ほど前、敏夫さんから「水谷さん、高いところ上れへんか」と尋ねられた。それは、蓮如上人御遠忌の頃は見事な枝ぶりであった松の現状を見かねて、剪定してくれないかという依頼だった。敏夫さんから声をかけられたことを意気に感じ引き受けた。それ以来「ボサボサよりは枝が整理されておる方がいいのでは」と、時期になると木々の様子を窺いながら作業をしているとのこと。

さて、平成十七年、初めて水谷さんは別院の聞法会に参加した。悶々とした気持ちは何とかしたいという思いからだ。その頃に、伊藤元先生の法話の中で藤代聴磨先生、正親含英先生の言葉と出遇い衝撃を受けた。そして、自分が行くべき方向を感じ始めた時、御遠忌テーマ学習会で小川一乗先生の「いのちは、いろんな関係の中で、いろんなご縁の中で、ただ今の私として、ここに一瞬一瞬ありえている」の言葉と出遇い、正に教えに照らされながら、自分の思い込みに気づかせてもらおうという気持ちが強くなった。出遇いを喜べる自分で

ありたい。ご縁をいただき、ご縁を喜ばせてもらっていることで、自分が自由になっけていける。自分の人生の中で果たさなければならぬことは多くあるのだけれど、そんな思いばかりではいけない。「自分の都合ばかりにおるとあかんよ」と解き放たれた思いがした。

昨年の報恩講で、三人の世話方さん(松下勇・丹羽計博・水谷さん)が「ようこそお参りくださいました」と参詣者を迎えていた。「人と人との出遇いを通して教えに遇う場」である別院で、出遇ったご縁が「また来れる」といいね」という言葉につながるように。



▲毎日のように奉仕作業を
していただいている水谷さん